

東西文明の比較 (6)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

最近、秋田県で山菜採りに来ていた老人が4名、熊に襲われお亡くなりになったというニュースがありました。縄文人たちも同じような危険を押しして食料を調達していたのかと思うと大変だったなあと考えさせられました。と同時に、縄文時代から今も続く「山菜採り」が素晴らしい伝統であると思うようになりました。

今回は、縄文時代から弥生時代への移行について触れましたが、私の大好きな「縄文時代」にもう少しお付き合いください。

縄文時代の足跡

縄文時代は「狩猟・漁労・採集」、そして「定住」「土器製造」に集約されると思います。縄文時代区分は土器で仕分けしていますが、列島最古の文化は後期旧石器に遡るといわれています。

人類最古の生活痕跡は8万年～4、5万年前の中期旧石器時代です。日本では、1949年に岩宿(群馬県みどり市笠懸町)で黒曜石の槍の穂先(槍先形尖頭器)が相沢忠洋氏によって発見されました。約35000年前～13000年前に属する現代型ホモ・サピエンスが残した後期旧石器です。東北アジアと共通の斜軸尖頭器やスクレイパー、円盤形石核が特徴です。

私たちの祖先であるこれら旧石器時代の人びとは動物を追いながら「遊動生活」を基本とし、墓地もありません。石斧・台形様石器・ナイフ形石器など、日本列島固有の道具類が誕生。

大陸文化から独立した地域圏を形成しました。その分布範囲は、北海道から九州鹿児島にいたります。自然環境・地理的環境に順応した地域的なまわりは、その後、縄文以降の日本文化として現在まで継承されています。それら縄文の文化圏は、日本を六つに分けています。北海道・東北文化圏、北陸・

東北文化圏、関東・東海文化圏、近畿・中国・四国文化圏、九州文化圏、南西諸島文化圏と呼ばれています。これらの文化圏を横軸に、時代区分を縦軸に置くと縄文時代が立体的に見えてくるのではないのでしょうか。

縄文時代区分を記してみます。

1. 草創期/13000～10000年前：晩氷期、世界最古の土器の誕生
2. 早期/10000～6000年前
3. 前期/6000～5000年前：丸山山内遺跡(約1500年間続いた大規模集落)
4. 中期/5000～4000年前：火焰土器(国宝指定)
5. 後期/4000～3000年前
6. 晩期/3000～2300年前：再び寒冷期に入る

土器の誕生

約2万年前の最も寒冷であったウルム期を過ぎ、13000年前の晩氷期になると、気候は急激に温暖になりました。ゴヨウマツ、モミ、ツガなどの亜寒帯針葉樹林帯が姿を消し、カバノキ、ブナ、ナラなどの落葉広葉樹林が増えました。それに伴い、ヘラジカ、ナウマンゾウ、オオツノジカなどの大型獣が減少して、ニホンジカ、イノシシなどが増えました。このような自然の変化を背景に、およそ12000年前ごろから日本列島には新しい文化が芽生えました。その動きの顕著なものが「土器の出現」であり、「石槍から弓矢の変革」です。弓矢による狩猟方式の変化は、先の動物の変化(動物相)と関係がありました。小型で動きの速い動物には弓矢のほうが有利です。土器の出現は、晩氷期の食用植物が豊富(植物相)になったことと深い関係があります。土器を持つ生活様式の確立は、竪穴住居の誕生・普及とあいまって、「安定的で定住的な社会」を作り出す要因となり、弓矢による組織的な狩猟の発達ももたらしました。

この縄文文化は、世界でも希に見る定住的で豊かな社会として8000年以上続いたのです。

日本列島に広がった落葉広葉樹林からは豊富な食用木の実が採集できました。ドングリ、クリ、クルミなどの栄養価の高い木の実やウバユリ、カタクリ、ワラビ、ヤマイモなど、野生のイモ類が豊富に採集

できました。これら木の実やイモ類は土器の出現で「煮炊き」することが可能になりました。「煮炊き」は、殺菌作用があり、栄養摂取を容易にするばかりか、木の実やイモ類の澱粉質が豊富な植物類とシカやイノシシなどの獣肉類と混ぜ合わせた美味で栄養価の高い食事を可能にしました。食器類は樹皮をはいで作った容器を使用しました。

初期の縄文土器の最大の特徴は、煮炊き機能にすぐれた「深鉢」容器にあります。現在のところ、草創期の縄文土器は世界最古です。

縄文土器と同じ機能を持つ土器には、北欧から東欧、ウラル、シベリアの櫛目文土器くしめもんどきがあります。中国江西省の仙人洞や朝鮮半島からも発掘されています。北緯30度以北の定住化傾向の食料採集民族に多いようです。これに対してムギ作の農耕民族である西アジア地域の土器は、食材や飲料水の貯蔵用が多く、ナンやパンを焼くためのもので「煮炊き」用土器はありません。

縄文人は農耕民族だった？

かつて、縄文時代は「狩猟・漁労・採集文化」で、弥生時代になって「水田稲作文化」になった、という説が常識でした。私も学校でそう教わりました。更に「弥生人が侵入してきて縄文人を山に追いやり、平野部を占拠して水田を作った」とも。

しかし、最近の調査・研究によって、その説が崩れてきました。その根拠は・・・縄文晩期には畑作農業が始まっていた証拠が出てきたのです。縄文晩期の遺跡から、日本では自生しないはずのソバの花粉や種子が見つかりました。これは、大陸からソバがもたらされ、食用のために栽培されていたことを示しています。

では、誰が縄文人にソバの栽培を教えたのでしょうか。

縄文後期から晩期にかけては、世界的に気候が寒冷化し始めた時代です。それに伴って、人々の移動が激しくなったと想定されます。そうした時期に北東アジアから、ソバとその栽培技術を携えて、日本列島へ来たのではないかとされています。

また、ソバのほかにもアワ、ヒエ、大豆、大麦、エンドウなどの種子が、各地の縄文中期から晩期の地

層から見つかっており、雑穀や豆類の栽培も、縄文時代から始まっていたようです。さらに、北九州の唐津市菜畑遺跡で、約7000年前ごろからイネの花粉が見つかるようになり、このころから稲の栽培が始まっていたことを示しています。

では、どのような畑作であったのか。

それは「焼き畑農業」です。縄文時代から弥生時代への移行が、順調に進んでいた証拠です。縄文・弥生の文化が共存していた時期がありました。これは、縄文時代にすでに農耕が始まっていたため、水田稲作の弥生文化を受け入れ易かったからではないかといわれています。

最近の発掘調査では、九州北部で始まった水田稲作が、わずか300～400年で本州北端の津軽半島まで伝播したことがわかってきました。東北の縄文人は、なぜ寒冷地に適さない稲作を取り入れたのでしょうか。約2000年前の縄文晩期末から日本列島はふたたび寒冷化が始まりました。海はやや後退し海面が低くなったことで、海岸部の肥沃な低地が露出しました。水田稲作には適した土地が広く確保できたのです。寒冷な気候といっても、稲作には影響が少なかったようです。肥沃な低地は沼でしたから、稲作以外に利用できなかったこともその理由でしょう。

しかし、稲作を始めたといっても、縄文時代の中心はあくまでも「狩猟・漁労・採集文化」でした。稲作が文化の中心になったのは、戦国から江戸時代です。ご存じの通り、大名の勢力の尺度や武士の報酬を「石高」で表示するようになってからです。

結論的にいえば、「弥生人」と呼べる人が大陸側にいて、日本列島に大挙して渡ってきたのではなく、縄文人が水田稲作や食生活などの変化によって形質が変化して弥生時代の人、すなわち弥生人と命名したということです。もちろんこの時期に、少数の渡来人が来て大陸文化の一端を伝播してくれたことは間違いありませんが、それらを「文化」に昇華させたのはあくまでも縄文人だといえるでしょう。

次回は「縄文人の一生」について書きたいと思います。

(続く)